

# 時間作品，時間価値，時間享受（Ⅲ）

武井勇四郎

## 第1章 運搬される時間情景

### 第2節 コト的時間

(ハ) 考え事 (本号)

### 第3節 虚構の時間

(イ) 作言

(ロ) 勝負事

## 第1章 運搬される時間情景 (つづき)

### 第2節 コト的時間

#### (ハ) 考え事

これから提題として取り挙げるのは観想の時間性，それもここでは特に回想の時間性が主となる。これを是非とも運搬される時間情景の一つとして取り挙げておきたいのは，これまで述べて来た事柄が概して身体外の外的事象と主体とのかかわりであるのに反し，今度は殊更，外的知覚関係を絶ち切った身体内の単主観的な意識現象に的を絞り，その時間的構造を明かして，いわば心中の時間性一般を浮彫したいからである。またこのことは後々に論及する時間作品を享受する享受者の時間性の解明に必ずや資するであろう。享受者の時間性は時間作品の時間構造と相関しているにしろ両者は峻別さるべきとするのが筆者の主張であるが，映画や音楽作品と違って回想過程は峻別される構造をもっているだろうか。

私は，今昨夜の三十年ぶりの同級会の帰り客として車中にあるが，居睡りも

せず、窓外の流過する景物にも眼をやらず、本や週刊誌にも手を出さず、隣り客とも口を交わさず、ただひたすら瞑目して、昨夜の賑々しい宴会を反芻し、また昨夜の宴会中にしたように三十年前の高校時代の諸々の淡い出来事を静かに追憶している。A駅からZ駅の三時間をこのことに費すべく努めている。回想三昧に耽ること——これが今の車中にある私の強い意嚮である。

今の車中は昨夜の爆発的な宴と打って変って静かである。確かに車中の瞑目にあっても時たま売子の子の音が響きその形姿が近くにほのかに浮び、また列車のレール音が通奏低音の如く終始鳴り響いていても、それは気がかりの音ではなく、回想作用を大きく乱すほどの邪魔立てはしない。それらの外音は昨夜の生ま生ましい心象情景と三十年前の淡い古ぼけた記憶心象が投映される心中の映写幕を一瞬波打たせるほどのものにしかすぎない。映写幕上の心象風景は決して外音によって意味付けされないし、連想の手がかりともならない。その上、今、私は睡気も催していないし、空腹も感じないし、腰かけている痛感もさして苦にならない、また排尿感もない。今、私のおかれている状況は、反芻と追想にとって絶好とは言えないまでも不都合のものでもない。しかし、心眼を殊更昨夜の出来事と過ぎし遠き日々にはたすら向け続け映写幕に投映し続け回想という一つの楽想を即興し続けることはそう容易な業ではない。時として回想に無関係な雑念が鬱勃として起りもする。するとただちに払いのけるべく努めなければならない。

ここでただちに回想の成行きに構造に突入することは出来ない。不可欠な最小限の予備的考察をさしはさんでおこう。

今この論攷を執筆している私は車中の私ではない。回想の「今」と執筆の「今」が同時でなく、時間的にずれるのは時の推移にもよるが、言葉の対象への距離にもよる。外的対象であれ、瞑目した眼前の表象対象であれ、言葉は常にそれから時間的に距離を保ってしかそれを表現し得ない特性を持っている。筆者がこの今の今の執筆最中にも、勿論、その時の車中の観想時間を一全体として振り返り、また三十年前のことを追憶しようと思えば出来なくはない。こ

の場合だと回想を回想として括弧で括って純粹に浮影にすることは出来ず執筆活動も混入して事の様相は極めて複雑となる。心中の想起対象や回想過程をそれとして浮き立たせるためには、是非とも執筆活動を今度は括弧に入れて取り外しておく必要がある。このこともあって私は、今、車中であってただ瞑目して回想している状態に身を置いているのである。

慧眼な読者にあってもう気付かれていることだが、「今、私は……している」云々と現在進行形で書き出している。それは後に示すように事実としての過去と記憶としての過去の存在様式の相違を峻別したいばかりか、回想の現前化作用と回想過程がまさに現在進行形的様式であることを示したいからである。しかし、昨夜の宴会は車中の現時点からは過ぎ去った出来事であるのに反し、今、車中でそのことを反芻している想起過程は、今現在の意識の地平における心象活動によるものである。一片の突如起る回想の像ですら今性を免れない。しかし合せ注意すべきは今現在、私の生身の身体が車中であって、現にZ駅に向って運ばれつつあること——このこともまさしく現在進行形的である。私の身体が回想に耽ること意識の周辺におしのけられ常には気付かれず意識されていなくとも、運ばれつつあることには何ら変りない。私の身体が誕生以来、今の今にまで持続している身体で今運ばれつつあることは看過さるべきでない。何故ならば記憶としての過去の担い手はこの生身の持続する身体であるからである。

「今、私は……」と一人称単数で書くのにも謂れがある。回想は私の心中の映写幕に薄墨の如く映る映像の静かな流れか、心中でオルガンで奏でられるフーガの即興演奏のようであって、私以外の他者が覗き見、聴き取るが如き代物ではない。それは睡眠中の夢の如くその人のみの秘められた直観対象である。この意味では算術や論理の思考と異なる極めて私の情緒的、情感的、情性的体験の自己中心的な秘儀の世界である。その上私の回想内実ともなれば多種多彩を極め、その都度細部が異なるのである。従って、「私の」「私が」「私における」等の表現様式がこの単子的私性を如実に示し得ると言える。

しかし、「私」は一人称単数の境位にのみとどまらない。読者も原理的には「私」であり、読者が文中の「私」に我が身を引き移せば、脇から私の回想過程を覗き見るような仕儀とはならず、私の回想過程そのものの中に居合せ、自らそれを追体験出来る手立てともなる。「私」とはそのような「私」でもある。この意味で、「私」は三人称単数の意趣が出て来て、内密な秘めごとの境位の「私」から開かれた「私」へと変る。こうなるのは、間主観的な言葉のもつ絶妙な、私性を超脱する機能によろう。私の回想内実は私であっても回想過程の構造は私的ではない。

とまれ、この三人称単数の「私」は自我意識としての自我主観に尽きるものではなく、回想の主体、つまり現にある生身の身体の主体である。よく言われるように自我意識は反省的二重構造をもっていて、回想過程の途上にあっても、これまでの回想の全体を回顧的に見渡しながら回想を進めて行く機能を内蔵している。今様の言葉で言えばフィード・バック機能である。しかしこの意識の二重性を支えているものは、かような作用をくり出している、私の生身の身体が一全体として常に持続している限りにおいてのことである。筆者が、「私」と言う時、常に生身の身体の一存在全体が含意されるのであって、純粹自我意識や意識の中核である純粹自我ではない。このことは次の根強く横行している臆見の反論にとって重要な立論となるように思える。

この臆見というのは「過去とは私の記憶に外ならない」という、一見真理を穿っているかに見える表現に要約されよう。この臆見はまた私の記憶量が、私の過去の量と等価であるというまことしやかな見解につながっている。ともあれ事実としての過去と記憶としての過去の同一視ないし混同が見られる。ここでこれへの反論を是非しておきたい。

今、車中で私は昨夜の宴会の一場面の情景を想い浮べるが、この情景はきわめて鮮明で生々しい。私は面と向って話した旧友の顔立ち、顔色、目つき、口もと、喋った言葉、彼の仕種なりをありありと想い浮べられる。心眼をこらさなくとも容易にただちに反芻できる。しかし、今、私は彼のこの面影に

話しかけても何の返答も返ってこない。私はどうみても帰り客として車中の人であり、目下、宴会場には居ない。現に眼を睜いても何も昨日の事物は見当らない。見当るものと言えば昨日の宴会場にあった自分の身体のみである。昨夜の宴会の諸々の出来事は眼前になく、それらは現時点から見てすべて過ぎ去っている。それらは今、汽車がA駅から空間的に遠ざかっているように時間的に刻々と遠ざかっている。如何に昨夜の宴会の想いが全開満開に咲き誇って私の意識の地平を領し支配権を揮おうとも、昨夜の宴会がそれとして今の現時点までそのままの形で持続することはない。もしそうなら、私は何も今車中で瞑目して昨夜の宴会のことどもを反芻するなどのことは全く無駄骨折りの愚の骨頂と言うほかない。あまつさえ私の身体が二つあることになろう、つまり、今、私の生身の身体が車中に有ることにかたて加えて、昨夜の私の身体が今もう一つ同時に有ることを意味しよう。私の身体が二つ存在するというのは、既に一全体としての自己の核分裂の始まりであって、多数の私の身体の承認となろう。しかり、この論法を貫徹すると私の誕生以来、少年時代の私、青年時代の私、壮年時代の私等々が万華鏡の中に映る数ほどの分身となって常に共存することになろう。映った数だけのものが私であるというのはいかに考えても奇妙奇天烈という外ない。どちらの私が真の私なのか、私が二つあることはそもそも私でありえないことではないか。

これを裏返した論法もある。昨夜の宴会の私は過ぎ去って<sup>〇</sup>いて無<sup>〇</sup>く、今、車中の私とつながりは全く絶ち切れているという見解である。これで行くと今、車中にある私は今忽然と天から降って来たか、地から湧き起ったかであり、少年時代から青年時代へと推移する歴史性の片鱗もなくなろう。私の身体の持続性がなくなろう。ならば私がわざわざ同級会に出席して三十年前の印象的出来事の顛末を因果関係をたどりながら旧友と一緒にあれこれと想起すなどは、こ<sup>〇</sup>れまた愚の骨頂であらう。一体何が故に私が三十年ぶりの同級会にわざわざ<sup>〇</sup>我が身をひき上げて会場に向向かなければならなかったのか。そしてまた旧師旧友の他者も何が故に宴会場に<sup>〇</sup>我が身を運ばなければならなかったのか。答は

一つである。持続している身体が記憶を担っているからである。今ある生身の身体が徐々に変貌を遂げて来たにしろ、その昔の出来事の何らかの痕跡を背負っているに違いない。当時の童顔は今の顔立ちに、その時の声ぶりは今の声ぶりに、またありし日々の出来事が別の形で脳裡に残っていよう。当時の出来事が別の形で身体内に沈下沈澱し、それが後に回想作用によって引きずり出され、回想の地平に登場するのは、何よりもまず私にとって最も手近かで手許にある私の生身の身体が、この今の今にまで持続しているからである。持続している諸々の身体が一会場に集合すること——これが同級会でなくて何であろう。私は病死し自殺した旧友とも昨夜話しを交わすことは出来なかったし、よってまた彼らと共に当時の事件を復元することもなし得なかった。何故ならば彼らは既に亡くそこに臨場すべくもなかったからである。

過去を過ぎ去ったことをもって無とするなら、被疑者は物証によって犯罪者となることはないし、逆に殺人を犯していない被疑者が、アリバイを証すことも無駄であろう。現行犯以外に罪人は存在しなくなろう。もっと厳密にとれば現行犯すら罪人として扱うことは不可能となろう。何故ならば今の私は昨日の私ではないという論法が成立つからである。

私は昨夜A駅近くの料亭に五時から八時まで居た、そこに居たという感じの存在感は、この今車中に居るといふ存在感とは別である。これが別で、前者が後者より前であると識別出来るのは、今車中に居ることによってである。昨日宴会場に居たという存在感は、私の身体が自然の一部として私が宴会場で自然的、人事的關係を生まましくとり結んでいたことによる。宴会場に居たという存在感は、これまで把持されている存在感であるが、それは昨夜生身の身体としての私が宴会場に居たといふことのその時の生の存在と相即しているのである。もし刑事がZ駅で起きた同じ時間帯の不祥事件の犯人として私を取調べるなら、私はその宴会場に居た存在感を言い張るよりも、そこに居合せた旧友を証人とするだろうし、何時の汽車でA駅に着いた等のいわゆる事実でもってアリバイとするであろう。何故ならば私の身体は自然の一部としてこれらの実

の事実と強い因果関係によって縛られているからである。私がA駅近くの料亭に五時から八時まで居たという事象は、数日後の時点からすれば、既に過ぎ去ってはいるが、その事象には私以外の他の人や物が因果的に参与していたのである。この人や物がそれとして持続している場合が多いのでそれを証人にし、物証として取り挙げるのである。犯罪者が彼の目撃者を殺害したり証拠品を湮滅するのは、それらが出来事（犯行）とつながりをもっていると見るからである。もし過ぎ去った出来事や事象が、全きの無となるとするなら何も持続する証拠物品の湮滅を図るなどの必要はないであろう。このことを裏から言えば過ぎ去った事象は、現在の生起事象の在り方とは違った在り方で存在していることを物語っていよう。

過去は無ではなく、現在とは別の在り方で存在していて、こうも言ってよければ現在を光とすれば過去は影である。光の光たるところは活動性であり、影は脱活動性である。こんな表現が許されるなら、現在は光在であり、過去は影在である。昨夜の宴会は色濃い影在であり、三十年前の高校時代は色薄い影在である。影在は常に光在につきまといそれから乖離することがない。

私は今、車中であって高校時代の印象深い高原の出来事を想起する時、今ある私自身とは何か別のもう一人の〈私〉が彼方の高原に居て、真夜中、焚火に向った面を熱く感じ背を非常に寒く感じるのを覚える。この〈私〉が高原に居ると覚えるのは、今車中に居ると感じるのとは異なるし、高原での寒さを覚える〈私〉は、今車内の快い温度を身に感じている私とは別個である。この〈私〉は旧友と共に高原に行き野宿をして一夜を明かした〈私〉である。しかし、今車中で想起活動をしている私ではない。前者の〈私〉は影在の私であり、今の私は光在の私である。この〈私〉は現在の活動性を脱した私である。二つの私があるのではなく、現在在るのはあくまでも今車中に居る私であり、高原に居る〈私〉は影在としての私、過ぎし日の私である。それは色の薄い淡い影在の〈私〉である。車中に居る私がこの〈私〉の所在に衝き当るのは、私の覚え、つまり、記憶による透視によってである。つまり、私が私の身体内に沈澱

していると見られる当時の事象（出来事）の相関者を回想の地平に引きずり出す時にである。この相関者とは何か。これを明らかにするために「遺影」という言葉に注意してみよう。

遺影は今では亡き人の写真（写真像）であり、その人の生前のある時点の相関物、つまり写像である。この写像は生前その人との光学上の因果関係によって生じた、生身の被写体とは別の存在様式の転換像である。別言すれば被写体と沃化銀フィルムとの光学的相互関係によって出来た事象、つまり被写体の形姿と色彩のフィルム面か印面紙における定着である。この定着が写像であり、被写体の相関者である。この相関者はその時の光の現場の中でしか生じない事象群の一つで、その現場に根をはやしていたものである。しかし、その後その現場を離れて独り歩きするものとなる。この点でその相関者は根なし草となる。遺影の場合、写った人は今は亡き人であるが、遺影（写真像）は写像の担い手（印面紙）が持続している限りそれとしていつまでも持続する。その人は死んだ時点で生体としての持続は終るが、写真像の方は遺るのである。この写真像は当時の現在のその人の写真像であって、今現在のその人の写真像ではない。当時の現在というのは今の現時点から見れば過ぎ去った現在である。従って遺影とは影在の相関者としての写像に外ならない。亡き人とは生体としてほろびたまでであって無となったのではない。影在は決して無のカテゴリーに収まるものでない。

元来、日本語の「影像」は絵画に描かれた人物像の謂であるが、よく考えて見ると先きの遺影と原理的には何ら変らない。何故ならば肖像画に描かれた実人物が今生きていようとしまいと、その肖像はその人物のある時点の写像であって、現時点からすれば過ぎ去った現在（影在）の像にほかならないからである。もし写真像のある被写体の影という意にとるなら、影像は「影の影」となろう。○印の影は影在の意であり、△印の影はその写像の意である。

これで影在とその相関者たる写像の区別はついたと思うが、しばしば影在とその写像が同一視されたり混合視されたりしているので別の比喩を用いて説明

しておこう。外から光が射して今縁側に立つ私自身の人体の影が障子に映っていたとして、これを私が見るなら、私と影の関係は容易に見てとれる。実物とその影との区別ははっきりしている。これに反し私が室内から、障子に映っているある人影を見た場合、私が見るのはその人影のみで、縁側に立つ実人物を見ることは出来ない。障子がそれを不可能にしているからである。その人が妻であるか子供であるかは室内から推して見るしかない。否、実人物が本当に縁側に立っているのかも定かに決めがたい。遺影に当て嵌めて言えば、それは障子に映っている人影であり、亡き人はその人影から推して見るしかないのである。まさに亡き人の影在はこの人影から透視的に推して見る存在と言えよう。従って今は亡き人の写真が、在りし日の姿の面影であるのは、写真が在りし日のその人（生身の身体）の別の存在様式をもつ相関者として持続しているからである。

鏡は光をまっぴらしかその機能を果し得ないものである。鏡は今の今の光において物を映すもので、過ぎし日の事どもを映すことは出来ない。過ぎし日は今の光の中になからである。人は在りし日の自分の姿を写真という影在の相関者でしか見れないのである。しかも、その写真を今の光の中でしか見れないのである。写真はその当時の鏡ではあったが今は鏡の機能を果し得ないのである。鏡はまさしく光在的機能しか果さない、別言すれば光在の相関者しかつからない。今の鏡像はまさしく生身の相関者である。

記憶も影在の相関者の一様式である。「過去は私の記憶である」という言い廻しには、事実としての過去と記憶としての過去が等価であるという等価式が隠されている。果して過ぎ去った事象は写真の密着焼きの如き相関者を身体内にとどめるであろうか。昨夜の宴会で私は高原で野宿した一件を想い起すために当事者と共に談笑した。夜、高原の寒さをしのぐために三人共同で薪を失散し夜びつて焚き出し、朝方ジャガイモを焼いて喰べた。そのことを三人共に覚えていた。マッチ→焚火→イモ焼き——これは自然的事象の因果系列である。だが三人の内誰がマッチを所持していたのか皆全く失念していた。事実として

の過去は因果連関によってすき間なく物や事象によって充填され充実されている。イモ焼きはマッチがなければ結果として成立しない。それに対してその相関者としての記憶の方は穴だらけで部分的欠落が目立つのである。このことから事実としての過去と記憶としての過去とを同一視し且同量視するのは大変な謬見であることが分る。三十年前の事件の追憶が定かでなく、継起順序の倒錯と細部の欠落が目立つのは、それは影在が色薄いからではなくて、その相関者が幾年の星霜を経て変容を強いられたことによる。丁度、高校時代の写真が変色し褪色しているのと同じである。今、車中で私が想起す諸々の対象は幾多の変容を受けている。しばしば想起される対象はかなり鮮明であるが、これまでに一度も想起されなかったものは薄ぼけていてつかみどころがない。その変容は後に述べる回想地平における時間の遠近的短縮によるのである。そこで昨夜の宴会が事実として如何なる時間構造をもっていたのかを確認し後に述べる回想の地平の想起過程の対比に資したい。

私は同級会開催通知を半年前に受け取っていた。その日の来るのを心待ちにしていた。開催日五月十四日は暦上の日付である。当夕刻五時に間に合うように汽車に乗り五時前宴会場に着いた。この日付と宴会時刻は私にとってだけのものでなく、既に社会的に取りきめられた天文学的自然時間の符号付けと言える。この符号付けは精度の高い時計が代行している。時計が私だけでなく旧師旧友を定刻に一定の場所に集合させたと言っても過言でない。それほど時計は社会的規制者の役を引き受けている。忘れてはならないが時計は等速度に推移し等質な位相を刻む運動機械であって自然の四季のめまぐるしい変化とは違う。春夏秋冬の変化は時計の動きと全く無縁であって、逆に時計はめまぐるしい変化に単調な位相尺度を当てて一年を日割し、一日に時刻を割り当てるのである。機械的な等質な位相で不等質な変化に富んだ一年一日の位相を測るのが時計である。時計は四季に、昼夜に、気温の上下に、人の気分の良し悪しに左右されない、無表情なのっぺらぼうの時間を告げるのでなければならない。ところで私の生身の身体は変化を遂げる自然の一部であり、とりわけ生物学上の

複雑な推移過程をもつ。それは時計でも計測されよう。現に私は戸籍上の誕生日年月日を持ち、またこれまでの経過年齢をもつ。普通、地球の公周期で数えられる。ともかく私の行動は社会的に取りきめられた暦によって規制されていた。

五時から八時までの三時間は、宴会場に掛かっている柱時計でその梁間は計測されるが、宴会そのものの推移過程は時計の時針や分針の刻む位相推移では計測されない。人が居らず虚ろなら宴会場の推移は物理的であるから、時計で十分計測されよう。宴会「場」は人々によって満されなければ本来の「場」をなさず虚ろな空間にすぎないのである。私は昨日かなり早目に会場に着いた、誰一人まだ居なかった。私一人が居ても「会う場」とはなり得ない。「会場」とはまさしく私が私以外の人と相まみえる「場」であり、しかも相まみえる他者が会場の受付人であったり部屋女中であったりするのではなく、三十年前に時を共にして過した旧師旧友でなければならない。何故ならば会の内実は同級会であるからである。会場に旧師旧友が集まり始めた時、もう「場」は成立しもう開会の辞の前に同級会は動きだす。私が一旧友と目を交わした時、宴の前奏曲は始まったのである。開会の辞、旧師の紹介、旧友の自己紹介、いくつかの車座の中で織り成す歓談……閉会の辞——これはもう立派な一つの交響曲の演奏のようである。ここにあつて時計は終りの時刻を告げる以外、何ら為すべがなく宴の推移の背後に退き、その無表情な顔を見せることはないのである。

よく人が会場予約の時、「会場が空いていますか」と尋ねるがその言い廻しは事の本質を衝いていて意味深長である。それはまず会場が空間的に空いているだけでなく、ある時間帯が空いていることを意味していて、借り手は空いた空間を埋めて「場」を創り、空いた時間間隔を自分達の宴の推移で埋めることを暗に含んでいる。ややもすると空いた会場は宴の時間を入れる容器のように表象されがちであり、また空き時間に時間が無いように表象されがちであるがこれは正しくない。宴会場は他の余計な事象が飛び込んでこないように仕切ら

れ、特定の宴が（ここでは同級会が）張られ得るように文化的に構造化されているのである。音楽会場なら演奏舞台と客席などが音響上しかるべく構造化されて造られている。この音楽会で音楽が演奏されていないなら音楽の時間——音で組織される時間——が創られない。音楽会場は音楽演奏を基礎づける文化的な物的基盤である。がらんどうの音楽会場にはそれはそれなりで音楽時間とは別の時間が流れている。それを人気のない無情な時間、のっぺらぼうの時間と言って差支えない。音の響く空間がなければ音楽がないように、宴が張られる空間がなければ、ある時点からある時点までの梁間に宴の綱を張ることは出来ない。張られた綱が虚ろな空間ののっぺらぼうの時間をおおい尽すのである。時間内時間の入れ子構造か階層構造を考えない時、空き時間に何か時間が欠落するという容器的表象が浮ぶのである。宴の時間は幾重にも下層の物理的生物学的等の時間によって基礎付けられている上層の時間であるが、それが下層に基礎付けられ層序的に築かれていることに普段気付かれない。しかし宴<sup>たけなわ</sup>の時、電灯が消えることによって、あえなくも宴の時間に亀裂が生じてしまうか中断してしまう。その時初めて人は上層の時間が下層の時間によって基礎付けられていることに気付くだけでなく、大変脆いことにも気付くのである。高度に構造化され、高度に高層化され、幾重にも層序的に基礎付けられていればいほど、最上層の時間はそれだけ脆さを示す。しかし最上層の時間こそ真に生きられる時間で人間的時間にふさわしいのである。

お喋り事の時間で既に詳述したように、この時間は単独の自我極では成立し得ず、共に話し合う他の自我極を必要としている。同級会の宴の時間は出席者の三十数名によって奏でられる交響曲であって独奏曲ではない。饗宴は旧師旧友という多数の演奏者による音の饗宴である。従って宴全体の五時から八時にまで及んだ長丁場の展相は、私が旧師と杯を交わし特定の旧友と車座をなして昔を偲んだ等の個人的体験時間の展相と同一視はされない。私が次々といくつかの歓談の輪に入っていた「場」は、宴会全体の「場」から見れば小さな「場」にすぎない。何故ならば私は宴会場の隅々で起っている出来事を一部始終体験

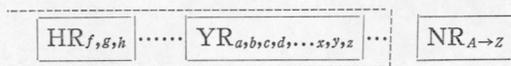
しているわけではないからであるし、そのようなことは不可能でもある。この点で私の個人的体験時間と宴会全体の時間とは同一視されない。しかし、ここで宴会全体の時間と個人的時間の相違について深入りは出来ないが、宴会の時間が個人的時間を内含しながらもそれを超えている上の境位の時間であることを指摘しておく。いずれ宴のような共有時間の共創造と一人旅のような私的時間の創造の存在論的相違について触れる機会をもつのでここでの詳述は差控える。

ともあれ以上の昨日の宴の成行きとその中であっての私の個人的体験の成行きは事実としての過去であって、今、車中の私の回想の再現前化とは別の存在様式をもつ。ここで本題の回想の時間に急迫しなければなるまい。しかし、ここでブルーストが『失なわれた時を求めて』でしたような回想内実の細密画を描き上げるつもりはない。必要なのは回想過程の時間構造をおおまかに剔抉することである。

今、私が車中で昨日の宴会を反芻し、高校時代を追想している状況は、回想の地平においてであって昨夜の如き「場」においてではない。確かに昨夜、私は旧友と円陣を組んで高校時代の出来事を共に想起した。その想起はその円陣の小さな「場」において可能であった、しかし、今車中で反芻しているこの時点には「場」はない。私は瞑目して回想の地平で昨日から把持されている宴の諸々の出来事の相關者に心眼を向けて再現化し、再現前化しているのである。この「場」とこの地平とに事実としての過去と記憶としての過去との峻別が見出せる。昨日の宴の出来事はそれとして今の現在に取り戻すことは出来なく、むしろこうして今車中で反芻している最中にも深い過去へと遠ざかっている。過ぎ去ったものは不可逆の故に逆戻りが出来ないからこそ、身体内に把持されているその相關者（＝把持像）を回想地平に引きずり出して、恰も過去を現在に引き戻すかのようにする。回想とは把持像や記憶像による擬似現在の作制、過去の擬似現在化である。しかし、決してそれは過去の実的な再来ではなく、こうも言ってよければ血肉のない亡骸なきがらの訪れ、それも変貌を来たした亡骸

の訪れである。この訪れにも遠き彼方からのものと手近かからのものがあるように感じられる。昨夜の宴の出来事は三十年前の高校時代の出来事よりも手近かにありその前後の区別は明確に意識される。その両者間には大きな空き間が感じ取れ、両者の前後の継起順序の混乱は不可能なほどである。このことは昨日の宴の相関者がまだ身体内に沈下しつつある新しい地層の事柄であり、三十年前の相関者が奥深くに沈没し切った深い地層の事柄で、沈下から沈没までに一つの濾過過程が前後の順序、時間的順序を決めていると思われる。フロイトの下意識と表層意識のイメージで考えても大過はないであろう。ただここで指摘しておきたいことは、身体内の把持像から記憶像に至るまでの濾過過程が、色濃い影在（近い過去）から色薄い影在（遠い過去）までの過程の時間関数となっているということである。このことが可能なのは体験する生身の身体がそれとして過去へ流れ去らず星霜を経て持続していることによらう。三十年前高原で体験した私の身体が、何らかの同一性を保ちながら、今の車中の私の生身の身体として持続していないことにはかような濾過過程は一つの時間過程とはなり得ないであろう。回想の地平を開き得るのは私の身体が変貌しながらも同一性を保ち影在の相関者を内蔵しているにほかならない。

私が昨夜の宴の把持像と高校時代の記憶像から過去の事実を透視的に見た場合、あらまし次のように図化できよう。



HR は高校時代、YR は昨日の宴、NR は現在、 $f, g, h, a, b, \dots$  は諸々の出来事や事象、 $\text{-----}$  は影在（過去）、私の身体は A—Z 間の車中にある。無論、回想に費される時間は A—Z 間の三時間であるが、影在が NR の中に内蔵されることは決してなく、反芻や回想によって過去が擬似現在化するだけである。

私は YR が NR の手前にあり、HR は遠い彼方にあるとはっきりと識別出来る。また、昨日の出来事の  $a, b, c$ , 等の順序は明確にたどれるが、私が高原に行ったこと  $f$  と河でスケートをして脳震盪を起したこと  $g$  との前後

関係はいくら記憶をたどっても定かでない。高原の出来事は夏でスケートそれは冬であるがその前後の決め手となる記憶が欠落していて決めがたい。既に生じたことには現在におけるような可能性は皆無であるから  $f, g$  の先後関係は因果的に決定済みである。よって事実としては  $f, g$  の順序転倒はあり得ない。それに反してその相関者としての記憶像に錯乱や混同が生じるのは、すべて順序よく充実していないことと因果関係によって結び合わされていないことによろう。人によってこの転倒や倒錯の程度が多種多様であることは、昨日の宴会で  $f, g$  の事件の当事者と話し合っても分った。A君は私より強記で  $f, g$  の前後順序についてこまかい因果的事実で説明してくれた。私はそれを事実としての過去として鵜呑にするしかなかったのは、過去の事実が因果関係に結ばれた揺がしがたい充実性をもっていると見るからである。この充実性と因果性は色濃い影在であろうと色薄い影在であろうと変りはないが、その相関者としての把持像や記憶像を担っている担い手（物や者）の方の時代的、時間的変貌によって、把持像や記憶像（記録）が変貌し、後者を抛り所にした過去の事実の透視が不鮮明になったりするのである。従って遠い過去の事実ほどその因果性と充実性が希薄化したり欠落したりするように見えるのである。そう見えるのは回想の地平でのことである。またそのような「見え」の発生には、過去の出来事を担っていた諸々の個物が時間の中で変化することも与っている。このことはこれまで部分的に残存し変貌している考古学的遺物や地質学的事実による過去の事実への推し測りを念頭に置けば十分はっきりしよう。

車中の回想に戻ろう。私は昨日同級会に出席したが故に、今帰る車中の回想地平は、会場へおもむくためZ—A駅間の車中で昨日あれこれと想い起し想像していたものより、はるかに複雑で動的な様相を呈している。何故ならば昨日の宴会で旧師旧友を再認し、彼らと話しながら三十年前の諸々の出来事を追認し、場合によっては全く忘却の淵に落ちついぞ回想の地平に立ち昇ってこなかった奥深い記憶が蘇り、賦活されたからである。また昨日想い起されたことそのものがもう把持像の一単位をなして、今の回想の地平に再登場するからで

ある。このことによって三十年前の他の記憶と結び合わせそれを動機にしてこと新たに別のことどもが想い浮んでくる。しかし、回想地平には常に都合のよい想起対象のみが浮び上がり登場はしてくれず、高校時代と無縁なつい最近の家庭的な日常的雑事も突如湧きでて雑音の働きもするのである。しかし、一旦回想地平を確保し、それを維持して行くと雑念は地平から退き、地平を大きく乱すことはない。ここに回想地平の統覚作用が働いているものと見られる。

地平と言ってもこの回想地平は空間地平のように定かでない。空間地平にあっては建造物、樹木等々は比較的固定的に持続していて、再三再四の外的知覚対象となるが、回想地平に出現する対象はそのまま永く把持されることなく背景に退くか消えて行く。場合によっては一瞬のうちに消え、他の対象に席を譲り、二度と出現しないものすらある。一度立ち昇ってきた旧友の顔かたちでもどこに焦点を合すかによって目鼻や口もとの立ち顕われ方がその都度変わるのである。それは映写幕に投射される映像の推移や音楽の音の推移とよく似ている。必要な場合には再三再四反復して登場を願うか同じ対象の変化を無理強いしなければならない。

回想の初めに私は昨夜の宴会での出来事の内、気がかりであった当時の当事者三人と共に高原の出来事をめぐって歓談したことを反芻する。それを記号化するなら  $YM_f$  である。 $f$  の一群の細部を追って何かのつながりを求めている内に高校時代の  $f$  に飛びついている、これを  $HM_f$  としよう。 $f$  は回想の動機であり一連のこまかな対象の集り（例えば、薪を集め、焚火をし、夜の寒さの感じ、ジャガイモを焼いたなどなど）でありそれを  $f(b', d', f', t')$  としておこう。これは反芻した  $YM$  の  $f$  の細部とは必ずしも同一ではなく新しい事柄も出現する。これまでは  $|YM_{f(b', e', f', s')}|HM_{f(b', d', f', t')}|$  となる。回想の地平では  $b', e', t'$  等々は出沒する事象であり、地平内に永続きはしないから  $HM$  において  $b', f'$  と反復されるのが普通である。音楽で言うなら  $|YM_{f(b', e', f', s')}|$  は小節である。 $YM_f$  や  $HM_f$  は高原の主題とも言える。ここまで回想して来た時、突如、河でスケートして脳震盪を起したことを想い



えよう。 $|\underline{NM}_{\underline{R'}}(b',t')|$ と符記しよう。しかし、主題は縮小されるとは限らず拡大されるところに想起活動の興味深さがある。想起活動は奥深い記憶を掘り起したり、氷解させたり、いもづる式にいくつかの対象を引きずり出すことに尽きず、それらを流動化させ自由に組立て直すことをもする。昨日の宴会の瑣末な把持像を篩にかける一方、興味ある高原の出来事に結び合せて新たな事象を回想地平上で創る。主題の核に様々な対象が貼りついたり結晶増殖して膨張する。一つの曲想における主題の拡大とも言える。 $|\underline{NM}_{\underline{R'}}(a',e',f',s',b',d',o',t',y')|$ といった具合となる。この  $R'$  や  $R''$  は次の回想作用のきっかけとなったり、それを基礎付けたりする。回想の推移はある把持像や記憶像の単なる機械的な反復、応答でなく、一つの自由な気儘な創作過程でもある。A—Z の全過程は A 駅から Z 駅までの三時間であるが、みられるように回想の錯綜する推移となる。

回想のテンポは見逃せない。昨夜の宴の出来事の細部を想起す速度は三十年前の出来事のそれよりも大きい。前者をアレグロだとすれば後者はアダージョに近い。これが回想の推移に微妙な緩急をつくりリズムカルな流れを産みだす。

さて回想を終えた時点より回顧的に回想推移の全体 (A→Z) を眺めれば、二つの主題  $f$  と  $g$  が全過程に縮小反復されたり拡大反復されたりしていても二重フーガのバッハのオルガン曲を思わせる。私自身そのような感じにとられる。しかし、この過程を楽曲の楽譜を奏でていると見るのは正しくあるまい。第一、回想には演奏すべき譜面がなく、回想の成行きの確たる目標も定めていない。確かに高校時代の高原の出来事と河のスケート滑りの二つの主題に絞られてはいるが、それは一つの枠組であって回想の成行き路線を敷いてはいないのである。回想地平にはこの主題と無縁な途方もない対象が出没するし、筋道たてていくら因果思想的に追ってもぶつりと切れて横道にそれたりもする。いかにも自由自在に事を運べるように見えるがままならず、もとの主題に戻すのに苦勞もする。そして既に想起されたことが、いつまでも回想地平に

とどまらないため、再三再四主題を反復しながらしか次の回想活動が続けることが出来ない。だからバッハのフーガ曲のように同じ旋律が調を異にして反復されるような趣となる。そこには移調や転調があり、また対立法による自由に進行する自由句フリースタットがあり楽節に挿まれる挿句エピソードもある。それは厳格なカノン形式というよりもフーガ形式なのである。フーガに逃走、遁走の意があるのは大変興味深く、回想地平に確保されるためには地平から逃げ去る主題、旋律を模倣や反復で追い求めるしかないからである。この点では回想はフーガのオルガン曲の演奏とも言えよう。

回想過程は諸々の細部の対象（一場の情景や仕種や言葉や体感や感情など）が回想地平に出没しないことには一過程を成さない。この過程が美事な旋律をもった主題展開のまとまったものであるか、様々な雑念が入り乱れた乱雑なとりとめもない過程となるかは問わない。ともかく回想過程がそれとして回想作用から紙一枚超越した在り方をしている。別言すれば地じから浮き上った図柄が次々と流れるのである。

さて私はこのように回想しながらそのことを楽しんでいことは疑いない。この楽しみ方は音楽会での生演奏を楽しむのとは異なる。生演奏は私から強く超越している聴覚対象だが、回想地平における回想の推移は心中にあって強い超越を示していない。しかし私とその回想推移に情緒的に反応し応答していないのではない。音楽演奏（時間作品）とそれと交流して心中に樹立される時間性との間には大きな存在論的へだたりがあるが、回想推移とそれと相関した時間性には紙一重のへだたりしかない。それは回想の対象とそれを享受することが共に心中の事柄であることによろう。それは恰も一ひねりして紙を貼り合せたメヴィウスの環に似ている。表の面をたどって行くといつの間にか下の面となり、逆に裏の面をたどって行くといつの間にか上の面に出て、この紙に一体表と裏があるのか怪しくなるほど薄い紙一重のへだたりと言える。従って私が回想することとそれを享受している時間性とは表裏一体で分けることが出来ない。別言すればそこには位相のずれが見出しにくいのである。そのためこの

回想過程には常に私の感情がはりついている。不快なことを想起すればたちまちそのことで不快となるし、楽しいことを想起すればそのことで楽しくなる。しかし、当時の感情は時間遠近の中で別の感情に変容もする。憎が愛に、愛が憎に変わる。

回想活動には従うべき回想譜はないし、回想後も回想譜としてしたためることも極めて困難である。回想はいわば、その場で演奏しながら興じ、興じながら演奏するオルガンの即興演奏、それもフーガのそれに喩えられよう。

私は車中で瞑目して回想の地平に高原の出来事と河のスケートの出来事についての細部の対象を何度も引きずり出し、それに対して即座に情感的、情緒的に応答し、更に主題を引き伸して拡大し、そのことにまた興じながら前へ前へと回想を進めて行く。これは過ぎ去った諸々の事実の即興変奏曲、その曲想は淡く軽やかで大きな起伏をもたない平静の調べである。バッハのフーガのようである。

私はA—Z間の乗車中、この回想の時間に生き生きられたのであって、今乗客として運搬されることに生きられるのではない。回想の時間に生きられるということは事実としての過去が回想の変奏曲として、今の今、この場において生き生きと演奏されることなのである。この即興の変奏曲が美事に奏でられるなら、それは一つの生きられる創作的な過去の開花、静かに流れるフーガである。それは事実としての過去の擬似現在化であり、私はこの擬似現在を自ら創りながらそこに生きるのである。

—つづく—